

中国浄土教における浄影寺慧遠の貢献

——『観無量寿経義疏』を中心として——

田 中 ケ ネ ス

一 歴史的背景

浄影寺慧遠（五二三—五九二）は六世紀後半に大きく活躍した学僧である。慧遠は仏教百科字典といわれる『大乘義章』の他に十四にも及ぶ註釈書を著わし、その大部分が今日まで伝えられているので、北朝の六世紀における仏教教理を研究する上で不可欠の貴重な資料を提供している^①。

一般に慧遠は信仰を持たない単なる学者というイメージが従来の研究によって強く打ち出されてきたが、実際には、彼は色々な面で活躍し、幅広い行動力を持った人物であったと見る方が正しいと思われる。慧遠が北周武帝の排仏に対し命をかけて反論した事は良く知られていることであるが、これを目撃した上統曇衍は慧遠を『涅槃經』に説かれる「護法菩薩」であると賛嘆している^②。

また、修行の面でもかなりの関心を持っていた事がはっきり

り認められている。例えば、排仏中の三年間、山に避難し、『法華經』等を一千回唱え、戒律を守り、修行に励んでいるし、隋になって仏教が回復すると、仏教会の重要な地位に任命されたが、職務に追われ修行に専念できないと嘆いたという^③ことも伝えられているのである。

中国浄土教の歴史の上では、この浄影寺慧遠より廬山慧遠の方が有名である。しかし、現存する『観無量寿經』と『無量寿經』の註釈書としては浄影寺慧遠のものが最古であり、特に前者（『観經』）の註が後の註釈書に及ぼした影響は、はかり知れない。これはすでに先学も認める所である^④。又、『大乘義章』には「浄土義」というような浄土教に関係するテーマに就いても興味深い見解が述べられている^⑤。

ところが、善導が慧遠の立場を批判したために、慧遠の浄土教理解は異端的であると見られてしまった。日本では、特に浄土教系統の宗学者によって善導を謂る「正統浄土教」と

する偏向的な立場が採られ、慧遠を軽視する傾向が主流を占めて来た。このような宗学を代表する徳川末期の学僧、靈暉は『觀無量壽經講記』において二十二の科目を挙げて善導と慧遠等の違いを明らかにしている。靈暉のこの理解は現代の中国浄土教の研究にも根強い影響を与えている。従って、慧遠の浄土思想の正しく知る為には従来の見方を越え、慧遠の書物を客観的に捉えることが必要となるのである。

二 『大經』という略名の最古の用例

『大經』とは浄土教の重要な經典の一つである『無量壽經』の略名として採用されてきた。道綽や善導等の中国浄土教学の論書にもこの略名は見られ、日本では親鸞の『教行信証』における如く頻繁に使用されてきた。又、近代でもマックス・ミュラーはサンスリット本を英訳するにあたり、『The Larger Sūkhavativyūha』という題名を付けているのである。『大經』は外はこの經典は『大本』、『壽經』、又は、『隻卷經』という、他の略名でも呼ばれてきたようである。この經典の題名を知る為に、六、七世紀の目録にあたってみると、次のように記されている。

- 一、『新無量壽經』と『無量壽經』（出三藏記集）
- 二、『無量壽經』と『新無量壽經』（法經。衆經目錄）
- 三、『無量壽經』（彥琮・衆經目錄）

四、『無量壽經』と『新無量壽經』（歷代三寶記）

五、『無量壽經』（靜泰・衆經目錄）

以上の如く、『大』という字を含む題名はなく、当時の目録による限り『大無量壽經』、『無量壽大經』又は『大經』はこの經典の「正式」な題名ではなかったようである。

慧遠は『觀經義疏』に於いて十一回は『大經』と呼び、一回のみ『無量壽大經』と呼んでいる。もし後者が慧遠の知っていた完全な題名であったとすれば、『大經』とはその最後の二字を取った略名だと考えてよいであろう。この可能性は、慧遠が他の經論を『涅槃』、『地論』、『觀經』や『地持』の如く、題名を二字に省略する事が通常であったことで裏付けられる。

では、この『大經』という略名の中で『大』が使用された理由はどこにあったのであろうか。それについては二つの事が予想されよう。まず第一は、『涅槃經』の支持者達によってその經典が同じく『大經』と呼ばれたように、『大經』は敬称であったということである。但し、慧遠及び、彼の周辺にいた者によっては、『無量壽經』が最も重要視されていたという証拠はどこにも見当たらない。第二の理由としては、『大』が長さを示し、特に、当時同じく『無量壽經』という題名でも称された『阿弥陀經』との区別の為に使用された可能性が考えられる。この『阿弥陀經』との区別の為に使用さ

れた可能性が考えられる。^⑬ この『阿弥陀經』の羅什と求那跋陀羅の両漢訳は『小無量壽』、又は『小無量壽經』という題名で知られていたことから、『大』がこの經典と対比したものであったかもしれない。^⑭ しかし、慧遠は『阿弥陀經』に就いて『觀經義疏』と『無量壽經義疏』の中で一度も言及していないので、彼が『阿弥陀經』、つまり『小無量壽經』を意識して『大經』と呼んだかどうかは明らかではない。慧遠よりやや半世紀ほど後の道綽は『安樂集』で六つの淨土經典を挙げる中、『大經』と『小卷無量壽經』を述べ『大』と『小』という区別をしている。^⑮

しかし慧遠に限って言えば、この略名を採用した理由は、慧遠の著作を見た限りでは明確にならない。いずれにせよ、『大經』を示すテキストとしては慧遠の『觀經義疏』が最も古いものであり、謂る正統淨土の枠外で始めてこの淨土經典の略名が使用された事はほぼ明かである。

三 『往生論』という略名の最古の用例

世親著とされる『無量壽經優婆塞舍願生偈』は通常『淨土論』又は『往生論』という略名で今日まで知られて来た。このテキストは、曇鸞によってその註釈書が著わされた事で示すように、これは中国淨土教に於いて最も重要視されたインドの論書である。この『往生論』という略名が最初に使用さ

れたのも唐の初期であるという説があるが、^⑯ 実際は半世紀ほど早く著わされた慧遠の『觀經義疏』にこの略名が使われているのである。^⑰ この論書のもう一つの略名である『淨土論』は道綽の『安樂集』に見られるのが最初であると思われる。^⑱ この論書は目録においては『往生論』や『淨土論』とは記入されておらず、『無量壽經論』または『無量壽優婆塞舍經論』となっている。^⑲ 又、曇鸞によるこの論書の註釈書にも略名は使われていない。^⑳ しかし、慧遠が『往生論』という略名を使用した後は、その用例が智顗が著わしたとされる『淨土十疑論』や迦才の『淨土論』等にも多く見られるようになってくる。^㉑

慧遠がこの略名を使用した理由としてとまずそれが慧遠の周辺で既に使われていたということがあげられる。まず、世親が『往生論』の著者であること自体が、同じ世親による『十地經論』を尊重した地論宗の学僧達に『往生論』に興味を持たせたと、考えられる。事実、この地論宗の一員であり、慧遠の先輩でもある靈裕は『往生論』の註釈を著わしたと伝えられている。^㉒ この註釈書は現存していないが、この記述による限り、地論宗の間ではすでに『往生論』なるものが慧遠の時代以前から注目されていた筈である。つまり、地論の周辺ではこの論書を『往生論』と呼んでいた可能性は高いと考えられる。

次には、どんな理由でこの論書が『往生論』と略称されてきたかを検討してみよう。まず何故略称するかに当って、『無量寿経論』としなかったという疑問が起きてくる。『無量寿経論』と呼ぶ方が『往生論』と呼ぶよりも自然であり、上記の目録もその略名でこの論書を記入しているからである。この他に考えられる略名としては、正式な題名の最後の二、三字を取った『願生偈論』あるいは『願生論』があるが、これらの略名も『往生論』よりは自然であったと思われる。

しかし、実際は『往生論』が採用された。この理由を考えるに当って慧遠の『無量寿経義疏』の次のような文章はその示唆を与えると考えられる。

門日。天親作往生偈。女人根缺及二乘種皆不得生。⁽²²⁾

この慧遠の文章によると、世親が著わしたのは明らかに「願生偈」ではなく、「往生すること就いての偈」即ち、「往生偈」であった。普通、「偈」に対して解説の部分を「論」ということから、論の部が「往生論」と称されるようになったという可能性が考えられる。世親が「偈」の部分の終りに「我作論説偈」と述べていることは、これを裏付けてくれる。だからその後、次第にこのテキスト全体を『往生論』と呼ぶようになったという推測が成立する。

四 凡夫觀の再検討

慧遠は『觀經』を凡夫の為ではなく聖人の為の教えであると見ていたと通常言われているが、慧遠は『觀經義疏』の始めに『此經正為韋提布説。下説韋提是凡夫。為凡夫説』⁽²³⁾と言いい、『觀經』が凡夫に適した經典と見ていたことは明確に述べている。このような誤解が生じた背景には慧遠がこの經典の聞手である韋提夫人を聖人と見たという誤った考えが存在するからだと思われる。

第一に、このような考えの一つの理由としては、慧遠の九品往生中の、上の三品を、聖人と位置付けたことが良く挙げられる。そこでは、上品は四地以上とし、上中品は初地から三地とし、上下品を種性と解行の位と位置付けたのである⁽²⁴⁾。慧遠がこのように九品を、高く見たのは事実であるが、この九品往生の人々を韋提夫人と一致して見るのは、善導流の見方では正しくても、慧遠の解釈では成り立たないのである。慧遠の解釈によれば、九品往生の人々は觀仏の對象である。『觀經』では韋提夫人と阿難に十六種の觀察の方法が説かれていたが、慧遠は九品往生を對象とする最後の三觀を彼らに実行させる理由として次のように答えている。

為令世人知其生業上下階降修而往生。所以勸觀。⁽²⁵⁾

このように、九品往生を觀察することによって成る可く高い

レベルの往生を目指すことを勧めているのである。従って、九品往生の人々とそれを觀察する韋提夫人等は、レベルにおいて、はっきりと区別されるべきである。

第二の理由としては、慧遠の次の発言が挙げられる。

第五段中「告韋提希汝是凡夫」彰其分齊。「不能遠觀」彰所不堪。韋提夫人哭大菩薩。「比會即得無生法忍」明知不小亦化為凡。

これにおいて靈眈は、『淨影ハ韋提ヲ初地已上ガ法身ノ大菩薩ト定メテ仮リニ現ニ凡身ニ而觀經ヲオコス所被ノ機成リタマフト云フ』と述べ、慧遠にとつては韋提夫人が聖人であったと解釈しており、この見解は現代の学界にも見られるのである。

しかし、慧遠が言う「大菩薩」とは靈眈が主張するような初地以上の法身の大菩薩という高度の意味を持っていたとは思われない。

まず、通常「菩薩」とは、十地の聖人に限らず、十地以下の解行から種性の位も含み、慧遠はさらに下の善趣の位も菩薩と見ているのである。次に、「大菩薩」の「大」は從來「極めて高度」というように理解されてきたが、慧遠自身がそのような意味で理解していたという根拠は彼の書物の中では明確ではないのである。それはまず、上述の慧遠の引用文を見ても明らかのように、慧遠は『觀經』が韋提夫人の淨土を見ることが不可能であることを全面的に認めているのである。

又、もし初地以上の高度な聖者であれば、仏力によって淨土を見、無生法忍を得る必要はなかったはずであるのに、慧遠はこのことを「仏力見」と言い、韋提夫人が仏力に頼っていたと解釈し、彼女が凡夫であることを認めていたのである。従って、「大菩薩」が何を指すのかは現在の研究では明らかではないが、それが靈眈が主張するような聖人という意味には思えないのである。

最後に、慧遠の凡夫觀から就いての誤解する理由としては、彼が『觀經』の宗趣として主張した觀仏三昧が挙げられる。この觀仏は凡夫の為ではないとよく理解されてきたが、慧遠は『觀經』では、凡夫である希提夫人に觀仏が説かれたと見るのである。この觀仏には、真身觀と応身觀という二種類があり、『觀經』は後者、即ち、応身觀を説くと慧遠は言い、更に、応身觀の中でも「終」と「始」とに分け、『觀經』では低い方の「始」即ち、「鹿淨信觀」を説くと見ているのである。従って、慧遠はこの經で説かれる觀仏は一番低いレベルのものであって、聖人ではなく凡夫の為の觀仏であると見たのである。

五 結 語

以上のように、慧遠の中国淨土教に於ける貢献度は極めて高いものであり、それは、先学によって既に指摘されている

ように、天台智顗の著作とされる『観經疏』への影響、新羅浄土教への影響、又は、『定善、散善、正報、依報』等という浄土教要語の初めての使用という実績からも明らかである。又、慧遠が往生の方法の一つとして称名も認めていたことから、中国浄土教の発展という課題に就いては、今後、善導流の謂る正統浄土教の枠を越えた研究を進めることをもつと必要されてくるであろう。

- 1 横超慧日『中国仏教の研究』第三、一五三頁を参照された
い。
 - 2 大正五〇卷四九〇c。
 - 3 大正五〇卷四九〇c、四九一a、c。
 - 4 藤原凌雪『念仏思想の研究』二一五頁。恵谷隆戒「隋・唐時代の観經研究史観」『塚本博士頌寿記念仏教史学論集』一二五頁。
 - 5 大正四四卷八三四—八三七。
 - 6 『真宗全書』五卷、一一二九八頁。
 - 7 結城令聞「観經疏に於ける善導釈義の思想史的意義」『塚本博士頌寿記念仏教史学論集』九〇七—九二四頁。大原性実『善導教学の研究』六一—六五頁。
 - 8 大正五五卷一一c一二a、一四a。
 - 9 大正五五卷一一七c、一一九b。
 - 10 大正五五卷一五八c。
 - 11 大正四九卷五〇b、八九c、九一b。
 - 12 大正五五卷一九一b。
 - 13 藤田安達『原始浄土思想の研究』一〇四—一〇七頁。
 - 14 大正五〇卷三三二b、五五卷一五七a。
 - 15 大正四七卷一九a。
 - 16 神子上恵龍『往生論註解説』一三頁。
 - 17 大正三七卷一八三a、一八四b。
 - 18 大正四七卷七c。
 - 19 大正五五卷一四一a二六九b、四〇七c、五四一a、九四一a。
 - 20 大正四七卷七八c、九一c等。
 - 21 大正五〇卷四九七c。
 - 22 大正三七卷一〇七c。
 - 23 大正二六卷二二一b。
 - 24 大正三七卷一七三a。
 - 25 大正三七卷一八二a。
 - 26 大正三七卷一八二a。
 - 27 大正三七卷一七九a。
 - 28 『真宗全書』五卷、二二b—二三a。
 - 29 大原性実『善導教学の研究』、二二二頁、広瀬泉『観經疏に学ぶ』序分義二、九九頁。
 - 30 大正四四卷八〇九b。
 - 31 大正三七卷一七九a。
 - 32 『真宗全書』五卷、一六頁。大原『善導教学』一三七—一四一。藤原『念仏思想の研究』二二四—二二二頁。
 - 33 大正三七卷一九三b—c。
- △キーワード 浄影寺慧遠、『観無量寿經義疏』
(助教授 Institute of Buddhist Studies Berkeley, California)